

第八・九・別巻

【私立図書館】

【図書館展示目録】

【八巻】約200頁

- 18 『京城文庫』(京城文庫、1909年6月)
 19 山口精『京城図書館概況』(南満州株式会社京城図書館、1916年)
 20 『私立宣川会館図書総覧所一覽 昭和十一年七月末日現在』(私立宣川会館図書総覧所(朝鮮平安北道宣川邑)、1936年7月)
 21 『財團法人仁貞図書館々况概要 昭和十年七月』(仁貞図書館(平壤)、1935年7月)
 22 李在郁『農村図書館の経営法』(漢城図書、1935年)

【九巻】約250頁

- 23 『開学七周年記念古図書展覧目録』(京城帝国大学附属図書館、1931年)
 24 『朝鮮字印刷資料展覧目録 昭和六年十月三・四日』(京城帝国大学附属図書館、1931年)
 25 『全国図書館大會記念朝鮮古文献展覧目録 昭和十年十月』(朝鮮総督府図書館、1935年10月)
 26 『『読書普及運動』記念皇漢鮮古方医籍展覧会目録 昭和十四年十一月』(朝鮮総督府図書館、1939年11月)
 27 『特別展覧会陳列図書目録 創立二十周年記念』(朝鮮総督府図書館、1944年)

【別巻】約100頁

- 朴熙永編 藤田豊増訂『朝鮮総督府図書館員録』(1979年)

21



仁貞図書館

平壤に設立され比較的規模も大きく、1945年まで継続維持された数少ない図書館のひとつ。朝鮮人個人による他図書館は、全て財政難によって廃館／公立化された。植民統治下、朝鮮人独自による図書館運営には困難が伴った。

20

私立

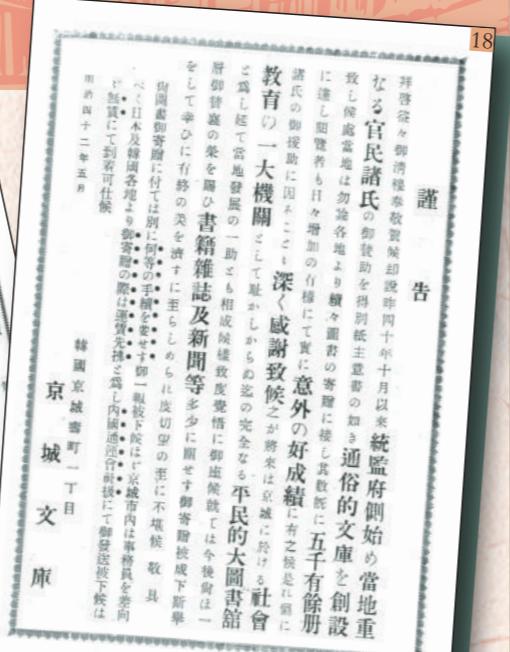
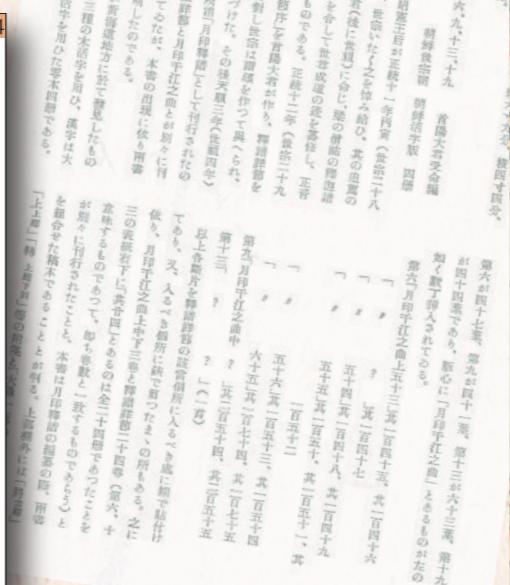
宣川会館図書総覧所一覽

宣川会館図書総覧所

本総覧所は、郷校財産（地方に設けられた儒学校の建物・土地）により朝鮮人自身が設立。この郷校財産による図書館の大部分は地方農村に設立され、地方文化向上、朝鮮民衆の啓発を理念に掲げていたが、蔵書数千冊以下の零細な規模が多数を占めた。

【図書館展示目録】

総督府図書館並びに植民地期朝鮮における唯一の旧制大学・京城帝国大学附属図書館発行の目録。後者は最大最良の蔵書を有し敗戦時には蔵書約55万冊に達した。



京城文庫→京城図書館

1909年京城寿町の日本人商業会議所内商業会議所書記長山口精によって設立。一般公衆に無料で公開、書庫・閲覧室が狭隘となつたため11年新築移転し「京城図書館」と改称。19年、経営難により閉鎖されるまで山口個人の私財をもって運営された私立図書館。当時の朝鮮では最大規模の図書館。

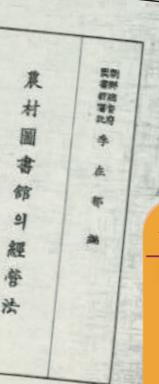
特徴としては、

- ①創立当初から参考図書館的性格をもった、
- ②当時最大の蔵書数を有し、蔵書内容も充実していた、
- ③20年蔵書の大部分が尹益善らが設立した「京城図書館」に継承された

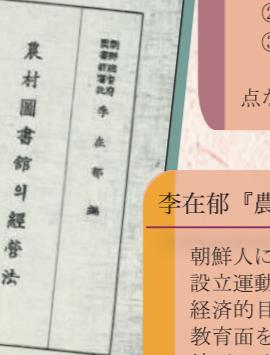
点などが挙げられる。

李在郁『農村図書館の経営法』

朝鮮人による最初の図書館関係書。30年代の農村図書館設立運動は、総督府による農山漁村振興運動に端を発し、経済的目的と強く結びつき、さらに「文盲退治」という教育面を重視し、その点で朝鮮人図書館人と農村青年が結びつくことともなった。本書で、李在郁（京城帝大法文学部朝鮮語文学科第1回卒業生、朝鮮総督府図書館主任司書、42年図書館別館長。総督府図書館が韓国国立中央図書館に引き継がれた後の初代館長）は、農村図書館が「朝鮮農村の基礎工作である」ことを強調、農村図書館運動に影響を与えた。



22



◎推薦文

「外地の図書館とそこで活動していた人々を抜きにして

わが国の図書館史は語れない」

田村俊作

日本の図書館史研究において、戦前・戦中の統治下にあつた植民地や占領地域など（ここでは一括して「外地」と呼んでおく）における図書館活動の研究は、次のような点で特別な意味を持つている。まず、外地の図書館は明治以来のわが国図書館の発展史の重要な部分を占めている。戦前期のわが国の歴史は、西洋文物の移入による近代化の歴史であると同時に、対外的な領土拡張の歴史でもあった。朝鮮、台湾、満州と、日本の進出先には、他と共に、西洋近代の産物である図書館も作られていった。それの中には、当時として高い水準の図書館があった。満鉄調査部、京城・台北の両帝国大学附属図書館、朝鮮・台湾の両総督府図書館、朝鮮の鉄道図書館、奉天図書館等満鉄沿線の図書館など、次々と思いつく。また、山中樵、衛藤利夫、弥吉光長、林靖三、閔野真吉など、日本図書館史を考える上で外すことのできない人々の活躍の場であった。外地の図書館とそこで活動していた人々を抜きにしてわが国の図書館史は語れないものである。

第二に、外地図書館の研究は、わが国図書館史の範囲に留まるものではなく、現在の関係諸国との関係の中で研究される必要がある。現地の人々との関係や、現在の現地図書館との関係など、関係は過去から今日まで多様である。日本人が経営した図書館があり、現地の人々が経営した図書館があり、図書館職員にも利用者にも日本人と共に現地の人々がいた。戦時に書物の接収が行われたところがあり、蔵書を引き継いだ図書館が今日なお現地で存続している場合もある。

外地図書館の研究においては、関係諸国との認識ギャップが起きやすい領域であるだけに、資料に基づいたしっかりした議論が求められるところである。一方、当時あつたほとんどの図書館は完全に消滅しており、また、戦後の混乱や政治体制の違いから、残され容易に利用できる資料は多くなく、しかも各地に分散している。研究の推進のために、残存資料の確認・書誌作成や復刻版の刊行などの地道な作業が俟たれるところである。

金沢文庫閣はこれまで、『戦前期「外地」図書館資料集』として、樺太、北京、上海、台湾と、関係資料を発掘、復刻すると共に、関連した研究論文もつけて継続刊行してきている。今回新たに刊行する「朝鮮編」では、朝鮮総督府図書館と並び二大官立図書館の一つとなる鉄道図書館、京城府・平壤府に設立された公立図書館、朝鮮人により運営され朝鮮人のための図書館であった京城図書館や仁貞図書館といった主要公共図書館関係資料を収録している。さらに、すでに復刻されている『文献報国』『朝鮮之図書館』と並ぶ重要雑誌『読書』や、京城図書館を開設した山口精『京城図書館概況』なども収録されている。主要図書館の蔵書目録もすでに復刻されている。本資料集の刊行により、戦前の朝鮮の図書館を研究する環境が一段と整備されることを喜びたい。

(たむら しゅんさく／慶應義塾大学名誉教授)

「戦前期「外地」図書館略年表—朝鮮編」

1901	道德運動団体・日本引道会釜山支部により図書館設立、03年に釜山図書館と改称、のち19年に釜山府に移管
1909	日本人商業会議所内に山口精により京城文庫が設立（11年に「京城図書館」と改称、19年経営難により閉館）
1910	韓国併合
1912	初代総督・寺内正毅による朝鮮語図書20万冊の押収・焼尽事件
1920	『京城図書館図書月報』創刊
1922	満鉄京城図書館の設立（25年に「鉄道図書館」と改称・官営化）
1923	第十五回全国図書館大会、京城にて開催。尹益善ら朝鮮人により最初の私立近代公共図書館・京城図書館の設立（26年京城府に移管）
1927	京城府立図書館の設立、1920年代公立図書館設立の動きの中のひとつ
1931	朝鮮総督府図書館設立、朝鮮の中央図書館としての機能を担う、萩山秀雄が初代館長
1935	京城帝大附属図書館、設立
1937	仁貞図書館の設立、京城図書館とならぶ朝鮮人設立図書館の代表のひとつ
1939	京城で第二回全国図書館大会の開催。第一回朝鮮満洲図書館連合研究会開催。総督府図書館事業会設立
1945	朝鮮讀書連盟発足

1910年の日韓併合以後は、朝鮮総督府の植民地主義的教育政策により、図書館をめぐる様相は複雑さを増す。すなわち朝鮮人独自による図書館運動と日本人及び日本統治当局による図書館運動が相互に影響し、反発し合い、また融合するという状況が生まれた。

〔本書などより作成〕

